



Handwritten Japanese characters on a paper label, arranged in two vertical columns. The characters are written in black ink on a light-colored paper background.



明和五戊子
歳旦

語 忍びて世を治るも
六ヶ敷 慮りて六十七歳の
生を治る 一羊舎

寝て待つに果敢かゝし花の香 晚鈴

心よも 懺悔 斗はるる言客 席南

敬るゝか 小 穉 虫 等 如 運 ぶ
叙 夕



其二

葉若山蒼生草如之何

園橋

叙夕

寂疎一之氏を莫^{ナノリッ}告原

晚迄

去風り古堂へ増引上り

席南

其三

日小傍る葉や嬾林のさる石

日下

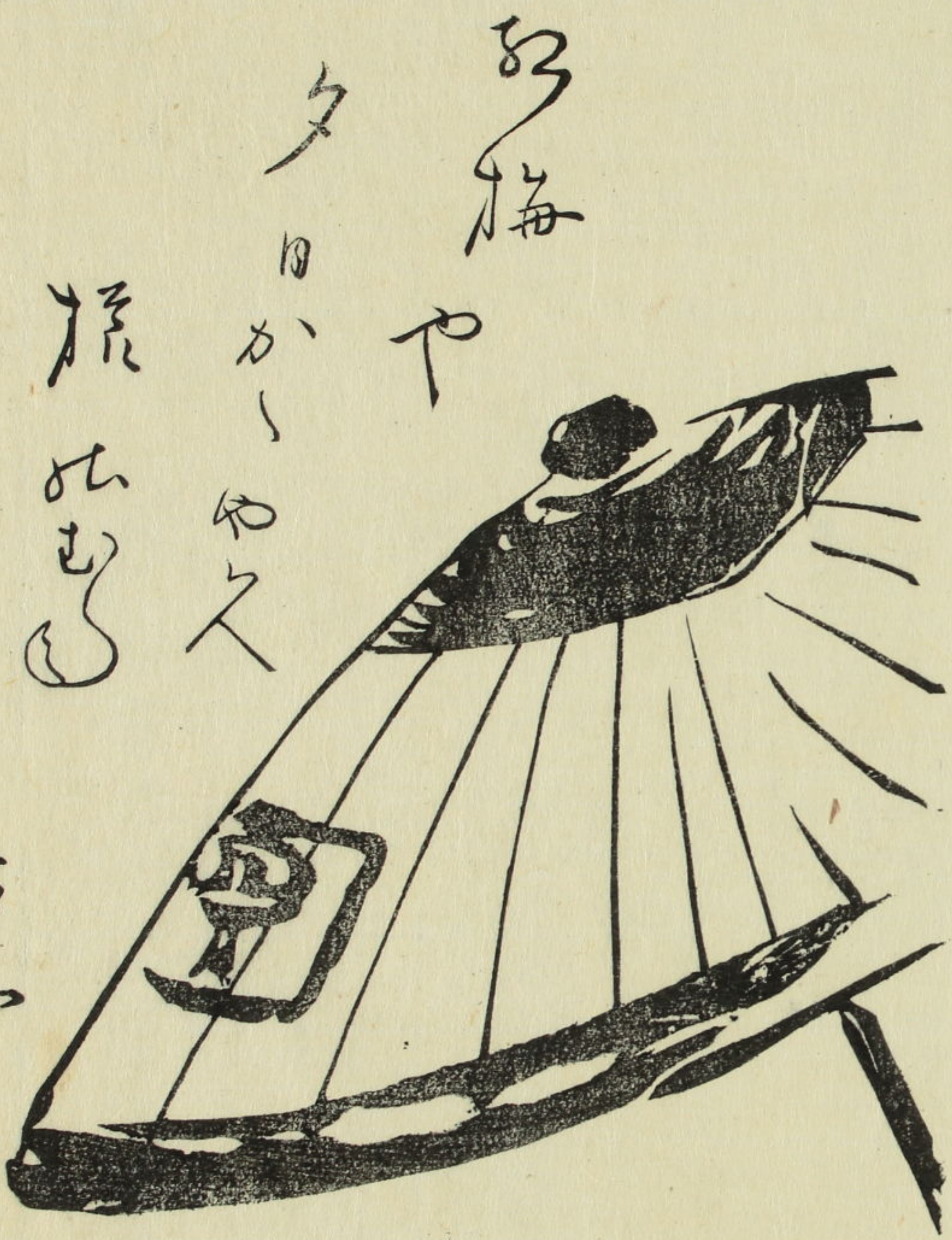
席南

翅如くくまへん之物

叙夕

蹄るりむり牛を起^たれて

晚迄



猿如

夕日
か
如久

后如

如

如

限

死
里
山

梅
を
妻
子
お
し
て

年
見
小

叙
夕

為
車

深
色
の
後
日
の
如
子

小
如
目

逸
便

去具

弥

勃

待

古々ろ

サ

御

未開如



芦葉巻
只湯

え 且

西大海策尋ニッ如船娘の如	身是未志かも根強し花の云	清濁りわかきて清き法を以	荷の花をひきましくも水如し	子少むきま初をのし初つ船山	ニッの道分て月を交し初日新	あ人の能き衣着より初日如出
少言古	陸上	有曲	赤笑	云东	萱子	濱綿

歳末

初給為の句地をこ 輝拂 舞上

日小面よりあゆみ 深つ年の坂 養古

輝掃くやかまー 小人よ去隣 我笑

是處去る後口 深や年多の傾 有曲

針乃内梅 舞るや 年内を去 舞る如声 云末

行違とくゆく 乞ひを 舞如海 童子

歳乃尾の長字よ 舞如あ中川 碧々

元旦

神空や何處も不盡出山ころろ 掃矢

舞 舞の年如

走みるくし 鏡ハあー 山座を

厄拂

除板乃 茶を流せ 舞如 掃

針ゆき去

板抄や 海を 舞如 花のま

きくまのつ

本免に採るのむらさき

猪矢

きくま

山姥を纏ふを借る押所

子に度上ははれ一十ハ

盡くすは徳

百肩ハはれと別

涙流しせは

ふはく

橋下一日をまはしめ

を免れん

叙夕

山姥

鞭も歩はゆるし乃案千里

石教

三十三天飾る松う枝

八重の如き禁を穿ぬん

呪針

法師を様も板向や滑川

良分

山姥ハ一旦の依姑はあはれを言は

ふはくハ八本を掛て一とせの

諸事場も除おの聲等ハ朝水

立去在縁

冬、如まやや、水津殿乃、障子法り

石鼓

立去の後任の江社系

宗子如、鏡や、年々、高き水

頤多、あ

香多、曲方、一、意の、海乃、校、珊瑚

上、立、書、又、入、き、る、よ

聖、き、花、十、部、乃、相、一、近、海、と、立

正朔

音訓

扁、嶺、砂、や、地、松、原、如、鬼、太、ろ、し 詞山

安、き、よ、積、き、し、雪、の、え、日 錯妻

二、三、月、太、も、お、つ、ふ、母、是、時、下

元旦

吉田

葺、身、牙、乃、昔、如、振、や、神、を、飯 饗妻

齡、競、人、海、山、乃、海、志 詞山

双、古、如、散、子、砂、原、乃、若、以、下

家尾

たき知れ大二十日永漢系 河山

針内志去

條摘や紙印取りも條志系 齋去

多玉翔

告後る多玉翔多飲 曆去 河山

寒夜

梅鹿 辛香し志をし冷志也 齋去

元且 予心多きをさうんこと云ふ
了合りしやえに

角

有かじり君の多し神初日乳 雲漢

湯気多し 橋小玉の後端 池南

さくし相踏も多し 味を去 貞婦

予乙 四十九のまじり
返して

中九し志し 言り人 的如去 池南

以 泣しりさし 言り人 与ら奴

砂塵小すろ 容も 時久ん如く 雲漢

ハヤシ

元月多 叔も月知成た一先外 貞婦

水小解家々物乃 暖 重漢

宝物名物約の中七上戯之 池菊

歌三首

用美言申の事あり 衣砵り 貞婦

掛ハハハハ餘而多緑々羊志 池菊

波風も去く後うらさる 北海 雲漢

古具

糸 襦

是 糸

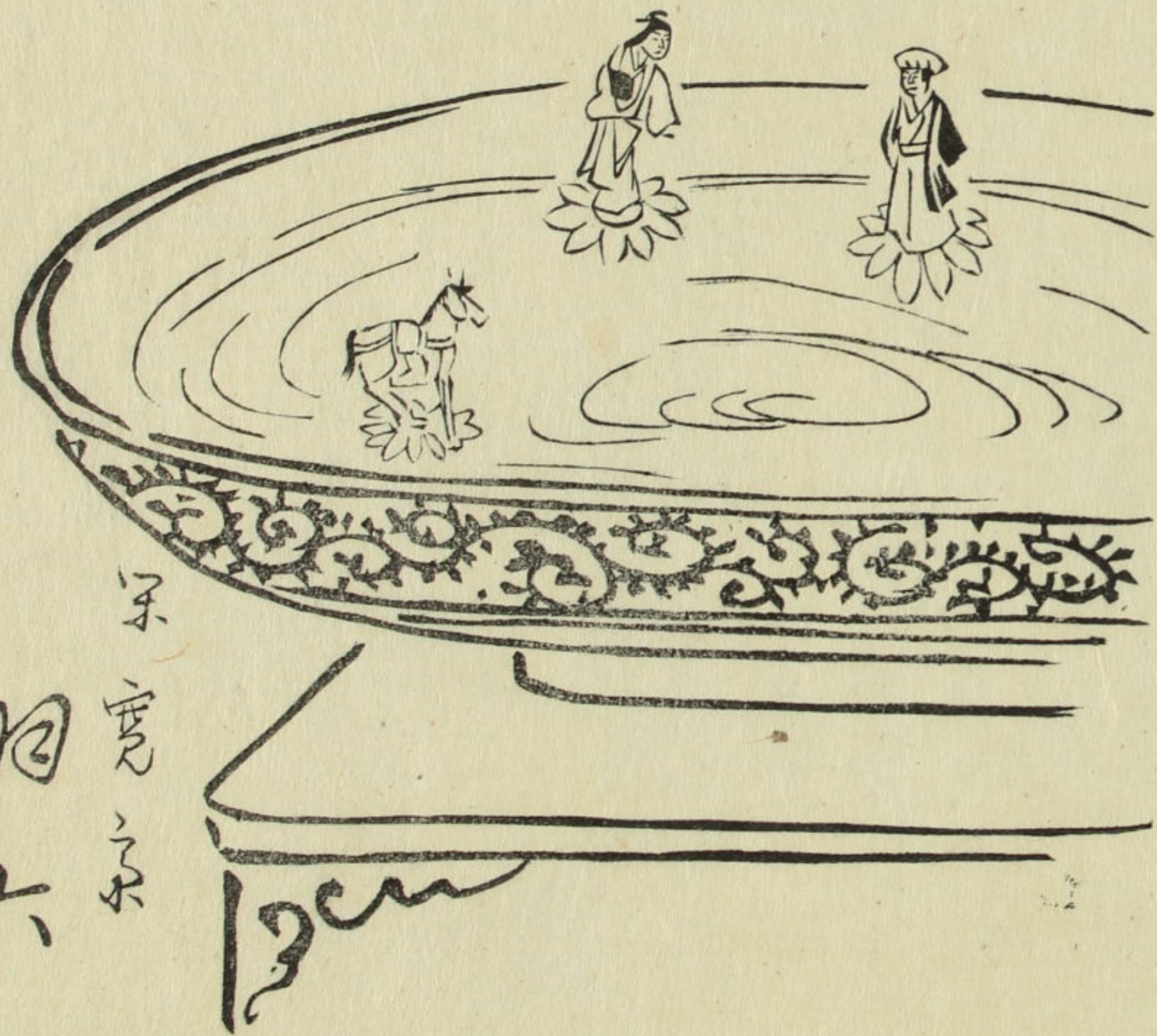
堂

如 子

糸

子

工



糸 寬 糸

羽 六

九

歳旦

かゝるて

子ころん

芸や

戎

石谷氏女

東雲



少少保

幾末もい子代と古免よ針籠

五也之

歸身

神如寺々幾代と結云に連飾

田更富

羽古

志やぬ門乃下 立松

二三掃鬚子梅所阿之れ

歳旦

餅花や白何々挿籠押摺

え且

芦葉尾

皆笑顔綴せんとあし鏡餅 呂湯

あゝ玉の目如くはるるこみ代の雲 楚流

除夕

眠しさを飽追えんたし去留 呂湯

夏まゆひ声より聞くらや夜の花 楚流

題 藪入

古郷といかふ去る尾のまゆ雲 一竹舎

語且

水や田舎と京も深きと 田中 緑英

枕も夢伊達とふと物も出 小色 一村

睡し手散らや門出松夫婦 村向 善魚

歳暮

行もあゝ冬強し年の市 一村

葉もも深きと毒ある針の刺 善魚

ふとふしの笑あ先や年の早ゆり 張英

三三

昔分や序ふゆらぬる笑ふ
百助とよ小名目知交しつ男
吉帆引て去を積来入宝舩
一村

去る

若村乃理や天鵝絨の如き菜
石鼓

去る

世ははるく砂をよきあは
け
一室舎

三三

若くはと告る時斗やゆり新
門松や神代も之はの物類
連人
宇野菜

去る

市をぬふ渡るや針乃矢橋門
齒菜の葉の波静しつ如海
連人

針内きま

不き妙よりや去るも門針の由
宇野菜

去息

梅の香や中へ生垣ハ冬は休 運人

元旦

谷中

園を里とて置りて云ふ物 探石

宝船を舟とて置りて置る物 金芽

逢ふ

石年神のまじりて
あかしくまじりて

神の御子倚りて置る物 探石

東の雲を越え置る物 探石

年内を去

古年とて置る物 探石

餘り

去寒し被へ六ぬ物 探石

年内を去

差声や海の名の付物 探石

冬

吟 二三年のまじりて
あかしくまじりて

夜やおかし 探石

蔵旦

元子橋より
神を遠く 行年八十四歳

是之方本あるもはして金堂山 平山 半々

百美后出如賀是多餅

苗代乃新ハ赤おの小槌あて

せし保

端き魚れ針の西月以天忘

まゝ

梅うき也 世乃海を象を道 逸也

蔵旦

越了の流尺の了し今物のみ 之好 毫水

指も無 昔集ま 佩も 袖 全 自吹

梅や咲 神目と玉出 糸合 糸 玉分 一笑

せし保

保拙出 昔年の 音被 一笑

第目より 忘る 年のあ中 外 夕吹

春倉いれよ 春程は 嘘か針仕 毫水

守貞

禁座其分の式をあらん文より
吉田社系御あまて一編を撰ん
撰りてんるの終に九あまて

神風や末廣かまはまの約 埴布

千世よやあまきりしゆあまのま 敬海

ゆゆの生駒の山吹咲る肩 何虹

年 尾 年本しふかれ人乃めて去し
れりし異あるま好ハ云益也
はるし

言訓の名ハまかへし 飾壺 敬海

十日御もく千代も標 年付心 何虹

去秋故陵の多き無上の因もくよく
有跡の二をみ終り年始るるも自視して

穠掃のこけ流石も心能し 埴布

穠雪掃るるを

山里此寒きおほらし凍屋 敬海

梅咲や竹籠好景の終に 埴布

年内立を

蓋もれも身の掛りや梅のむ 蓮京

おあーく

谷のまもりし蓋も梅の風 三者

言分

横越也原風禱の強き云 道乐

十日戎 新合ふをいふ 又新子戎

五百月を今一つ費人戎 管 今

昔柳や板も陸水とて遊 今

早旦

奥の尾古

ちの等や此おあり等福青 如泉

斗を積せりかの上新の上より云鴨 今

云朝

元日晴くし 吉星あらた

是て赤花よき事世も人福者乎 柎枝

而も新新合のまをいふ年を咲むや梅の云 道栗

逆舟の箸のちや神り云 音房

早旦

可け朝や妙をの内を素人顔 音房

疾くさの葉内あるし借賣 柎枝

再乃垢さして年の節云 吹乐

元旦

南紀見高

世の人ら海や糸の花乃ま
今ま 云有
さゆらうと髪も髪ふけり年頭
魁友

身指

山川や水の縁をわたり舟楫
魁友
抱ふんまき侍きうかひの暮
云者

三喜五編

年弱も花お己見ぬ庭裏付
一葉舎

梅

時弘

用年

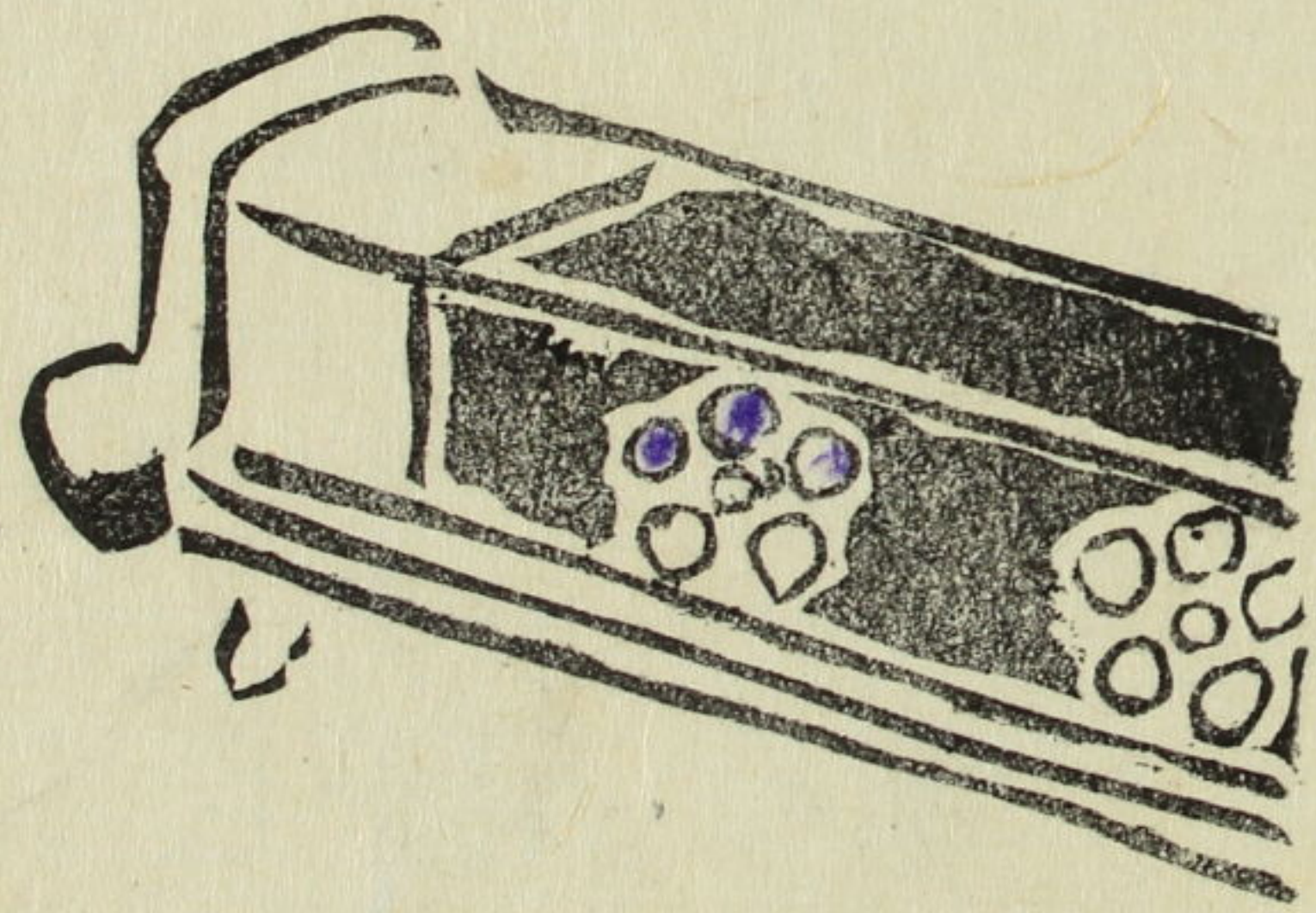
まか

梅
了紙

色紙か南

石鞆

犀牛角



竹隣菴

叙夕

去日過修房

亦 樓了

出 次

莖 也

隘

善

乃 稟



歳旦

古福や梅乃枝のき初旦 后女

年暮

給を孤言もせハ一き沙 今

三朝

々朝の雲神の志くもる也神の息 五粒
志はくもる懐出川福喜系 古粒
呼もるもふ雨後門松の花深き 尊

去たたきと愛より集めて音のま

存泥

年尾

書はめし揚る暦は年の志

暮

海山も水物ふーア年は暮

五粒

神如燈や梅もはつま

古鏡

木食の性根や勤く梅乃志

存泥

雪

踏雪よりれあり雪は

竹蜂卷

帝客操

歌仙

二膝も恋はささき古大根

石鼓

善て志のこえて音のまぬ

序曲

縁をこハ夢や花は月志をりよ

叙夕

手アと音や波の浪をる

音南

豆の月大乃集るあるはし私

真古

他佛と大りこりハハ治おて

執筆

了る筆も是く強訓松乃集

鞆

むつかるは冷る肩帽子より着るる
再眺のまき江指ハ附傍か
玉造り言し知し指さあおせ
志知の都も跡跡乃波
森の隅判く牛りたいて飛る
雙如霜おももまふまふ
侍女ハ控ふる百合小籠まふり
生し鑑くう花り尺せぬい
入歯仕と傍如侍くふ一工丈
呪り判く傍の言まふ

角古夕靱南 角古夕靱南

ナ

ぬんぬる久己之跡如侍侍
飛人形もふまめするし
片服きて尺せ身歌く大工能
近江甚乃流もハ斗目
破る乃顔と侍一くしの襦
引板車も言ふ御も言
言字々茶茶あてちんさる
外へ扇扇境君も侍借
丸木指渡して世も言外
二條よりくみ付花伸人

角古夕靱南 角古夕靱南

淑形を女に後少突物次

十^三 善賢り象此善苦の光の

寂莫と通あつた忘り響る堂

父祖々々を引き寄り提灯

改まら下部にたやく納る汁

一方、不二行爲をさす女

致す小云葉ハ花乃葉 繕

いゝ草の笑ふ菴に花宴

角 古 夕 報 南 夕 古 角

静日

朝暮好の予におろめ京族乃
抄れ是もく給ハこくも起出て

事紀日方

出か―本をこく給を毎く初授 文 鶴

末廣の―と改る妻 仙 枝

永日し言をさす如給よ―と 文 里

二

初め也歌乃輕着く日多苗 文 里

交あよ―と渡る梅栞 文 鶴

末廣く如の尻も 砾原乃 仙 枝

てしと

ふ代美第一 妻如 神日新

仙枝

鏡ると 服立 伊勢 由志の 鏡

文里

菅簾 振甲 亦 亦 亦 亦 亦

文鑑

てしと

如 上 之 中 山 一 漢 し 悟 是 川

仙枝

光 陰 乃 一 矢 乃 如 朝 日 新 船

文里

掛 之 や 年 の 世 々 経 集 之 ち かる とも

文鑑

元朝

飲中の仙をいふ
をいふともいふ

百葉如 長巻をいふ 山 かの 日

可保 抄 船
世巴

月 古 しい 浅 水 田 毎 如 物 日 新

言通

男 といふ 之 ぬ とも 知 物 日 如 如

取友

あゝ 五 や 工 夫 八 十 一 色 梅 如 笑

著山

身尾

黒 塚 之 部 々 中 如 源 流

言通

勢 口 一 如 々 乃 亦 如 皆 如 不 如 梅

取友

人よりの筆如 傷く 涼走の 野
志如 筆如 涼走の 野 涼山
汝已

え且

おきなきと 涼し 筆如 涼走の 野 涼山
今 如 醉

解り 筆如 涼走の 野 涼山
純中

筆如

行 筆如 涼走の 野 涼山
純中

人 筆如 涼走の 野 涼山
純中

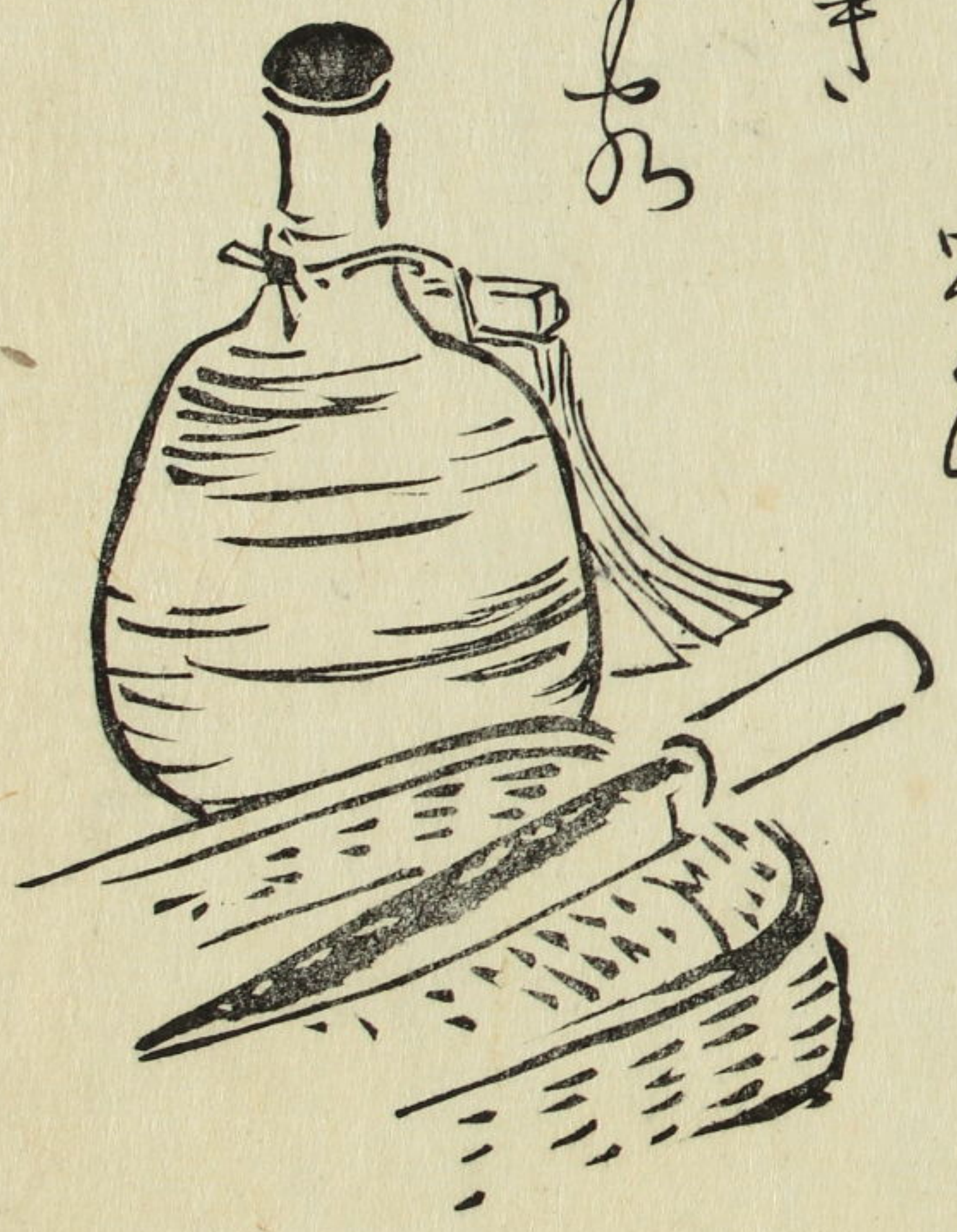
南紀 日方浦

鳥 毛 文 鴉

アム

かけ 筆如

織 筆如



歳暮

夜下子一葉如山も有

竹瓦勝

坪房

我論了因見

意中如了此か南

東君

一毫泉

下福乃解目

一雲歸

山の端よい出端

歳暮

伊丹連

皆涉よくふや年の花も花

才一毫

今

無子咲花ハ集千代錦の花

里楓

今

柳原

昔幣紙流あをわゆる門飾

針玉

今南

え日や垢ぬき此は山かつ

匂洞

去 息

後 依 倚 小 羽 織 を 着 せ せ
去 息

巾 風

今

九 皋 亭

世 昌 者 の 味 々 知 ら ず 家

露 中

冬 之 山 さ 々 々

伊 丹

仙 也 乃 石 あり 下 弦 の 音

鬼 凡

去 息

必 強 夫

夕 風 也 連 翹 の 葉 未 止 也

次 音 貫

歳 旦

より あり なる 年 の 音 なる 伊 丹 也
望 此 札 也 出 一 侍 一 子 あり ち 方 の
意 有 し 此 札 の 表 を 又 一 式 大 意
多 秋 あり 元旦 多 小 意 思 入 心 也 凡 也
和 功 著 世 藤

意 之 家 笑 顔 八 増 和 々 釣 の 雲

吉 村 電 子

今 節 を 見 え 古 里 耶 様 此 神 月 氣

涼 風

年 内 立 去

去 年 今 年 越 へ 厄 脱 ち 吉 也 凡

今

去 息 尾

顔尺也此札も常りると針の本戸 龜子

春自奥也

和局出石

三千と也此實も之をいしや柳の乳 哉風

百柳

花如るりもいし石の窓か南 今

立寄主線

小枝

年此内子子女を声や去支度 善山

婦末音系

糸を海沙をも思ふあ一衣 沙巴

年尾

四條御て男子は佳格と云まを
定規して佩ふ之を妙也声も少して

和女柏原

吉川

男多花初めくふくくは成この角 三石里

田井云

子よ寒く来雲云し神の天顔 一石

古依町

雲如戸や鳥も鉄て明をい免 一噪

子目も云神遠とふるも云分を

日正

之節門子柳のき免しや幼子の目 芝岩

市尾 前休尾

さ門と女蓋明て局氣をいしはみかか 水

年尾

年川不入性相は云 扇善か柳 一石

年内立去

涙聚付も先年内内り 始ふこ 一噪

来り身枯き世に生るん 豆 男 芙蓉

去る

燈石も遊きカラや除夜の風呂 如水

去る

夕極の中を少かき極の星 芙蓉

年内立去

言等もかき年枯梅乃花 云子星

元旦

杖突て去毎為し昔程如松 結成去谷 金矢

足もくも汐糸の孫也云乃鞠 日念水 鉄秘

降くくや去来又てく自乳 日三四 一水

日有産交世多新者如四つ酒 日森上 波留

身指

知恵と知恵くく一合より大卒自 鉄秘

長い年俄り来る言多如 一水

針少砦跡上 往來如夢の糸 金矢
見改る如神の沙を流能女房 波留

山谷卜居

早咲や吃乃言来下倉 親 金矢

少少保

斗波や飄々通る自然居士 武徳

古 威

債拿此不速高家師を以 去雄

茶旦

桐を好む花事々々後市代の去 水煩

門松や宴より神代の道知る一 巴山

石山へ杯とて飲乃酒日かか 富倉

中や花事ある園も初かきみ 林山

少少保

蓬菜も餅もて除夜の園尺八 巴山

田村殿と噂も芥人年男 富倉

人よりあはれあはれとて碎々
思ふ何事か此は世に肥の花
林山
水

空鳥

代もあはれく礼の方へ云つた物
蓮糸

新玉乃吉 公よ 旅あつたあつた 花 に 何 掛 け
園竹

桑音

世の中もあつたあつた年のは
園竹

投入事度精小花や白の音
蓮糸

新波 津浦香山
あはれ 詠の文母と
のあはれ して
まのあはれ

あはれ 親

付、あはれ

梅 孤 花

あはれ 梅

梅 矢



去奥

濠陽

千古尾

梅咲や声孤

文江

九龍牙 履子

詠事

原を枯方く雪ふ

今

ほろく

海士々宿

龍旦

多田

山下連中

松の香此自心ハ言し初日新

千九

山峯よ積海もよろあふ初日新

龍形

いさか能く煮ん志事又の笑ひ

友石

書人喜々喜おす可也日の佳

養点

思ふも思ひは嫉しをり旦

梅十

遠おや駿河を富士と

右里

集善

君の炬燵床伸張し一年の縁
 福のぬ人や少き如き乃梅
 六十四五子増年如き古き如き
 古くろ富士漢も継ぎも如年の
 流矢不浮本とゆきも年の
 百と夢の昔もし乃流か南

善点
 梅十
 留形
 友石
 右里
 十九

去息

意きぬ眼もあやうれ

梅の縁

右里

歎仙 海迄梅

世ふれぬを怒んふ山風梅如花
 新婦を誘ふ浪連ハ梅葉
 雨のそる陸先はく小猿集して
 若く麦振舞も何れ一物
 韻流をかえもいふ如桂新
 夕のそる小舟如桂ハ流し
 紅葉もも狸のた好舞を憎むて
 遠舟持南先ハ夕暮

叙夕
 石靴
 席南
 夕報
 南報
 夕報

糸の緒は町へ席く 緞帯
 瘧疾りり落るる 姑女を祀
 有る事なき内よちや 殿へ 撥
 体む屏風女をきて 屏て 然
 洗ひし衣もよき 子を有知いよつと
 西施もきけは 西朝王樹の肌
 御殿に平相園と 小松殿
 花雪の耳りて又 隠
 月又 筑る意の 交へ 唐女 唐
 毛ふかしく 数り 今ハ 唐
 今南 今 今 靱 今夕 今南 靱

答これぬなきるハ 續し 秋の暮
 ちのちりしと 服を 二天 衣
 晴天のさき下りし 時 夢の 外 衣
 公家侍り 者 心
 難 神よ 大 綱 結 句 世 ありて 昔
 是 代 衣 と 着 後 ハ 土 戴 て 襦
 変 成 り 女 子 の 着 今 まで 持 ち ぬ
 陣 の ころ も 今 今 今 今 中
 や たり ぬ 袖 先 今 今 殿 折 ち ぬ
 月 の 程 所 今 眼 の 涙 今 者
 今夕 今南 今靱 今今夕 南

急かえぬ松を一古此カ、痛
 旁此ハ誰カ、鏡元瓦子
 十ウ 著志人盤を踏へて精もせに
 碎ハ一して画も加勢集る
 平家めく紅箱此禪一かまの初メ
 古威門此一常月の指
 綴本と兼て志此ハ花見能
 今此上と所皆猿乃 破麻
 今 南 今 報 夕 南 今 鼓
 今 南

元旦

心有り喜ぶ事あり

新玉や交威男子此誕生目
 松井 望栖

針尾

うま玉此髪や梅々香宵飾
 今
 立去去去縁

生か一門針此空候 去男
 今
 去 息

今 梅や 嘆云人 多き子の月
 今

年内をまゐ

さの相如小判や針乃西のま

居里

歳 著

障扇く富夫持家乃おき家

梅里

歳 撰

指さかる印子人礼係女月如

吏高政 竹照

セの原

泥多持乃泥多よ化く少毛が

东河 宇菊

去 真

重く 年入 家

堅立の 筆

一 雁 如

横 月 射

竹 障 扇



妻 貞

人托の由り申分なき事
其の由り人なれり

命毛お長し遠里小舟去来 舟 舩

やま保

少走話の外を遊身や古庭なり 事 天

音 貞

玄梅や古音此茶店より来り 吳 橋

年 渡

五月月如橋子 教 一也年惜り 多 洲

守 貞

石水や井水の味は冷と来 扇 岳

言 分

笑いんと山も玉也遊儂の如 茶 枝

やま保 男多と保

くま子と茶れ 山 藤 中

伴 冬

不三三

言 見 了

言 有

月子富も何も志る 子 教 兩 け 三 碎

去真

魯重政

人々くも猫や膝ハ一人多し梅

仙容

年内まき

套々

之芽種如子粒よ熟く冬し梅

踏外

云物

無悦や海山かけて信物

真丈

正言

喜信も一玄借人走り去

逸叟

年内まき

東風小い奈沙まの梅の深し程

暮年江

冬し修 畧あま

花よ春よりくも 難波の冬梅

昔瓦

歳旦

氏神も云つた物も花 雨

時香

年内まき

走る原の志もいむ梅の花

右北

年内を去る

千の名此の苗也年の統乳 石臭

セシ係

のり見る目の記 行や古曆 費丈

川より

ちり立治遠小川此柙也 雲車

去る

まけものく位系あり 梅の花 松雪

年内を去る

年と年と、砂を十云板新枕 魯谷

去る

酒汚れ海流り終り也梅の花 炉良

去る

海りも遠海の子夜語り 鮎川 魚亮

年一措

年の間を去る而已月の際望海 手巻 語来

歳首

五回系

初風や左平視心古代如如 五回

急系

よられたも此君也し時々云 全

去白

去の去しを不其の勤く 孝詣

今

頂高連斗不志斗して梅見心 色豊

去白

掌や陰布の音多能一層不也 儿堂

年の暮り 伝去社系

冬かき美門乃此去物錦 周系

去白

新なる旗布の去や古云十日 鳥泉

云 伝 生玉 社系

氏神も今年ハ此方采結心 五灯

早ま

去のちる麻子ぬたろふりけきぬ

李箫

夫りて田

ある解ハ天共作候 秘名花

玉解

字のきり

途如答の指分髪やよめ男

巾糸

今

去一の年を大糸路用性礼

河南 十崎

後陽

東阿居士

題名不

周

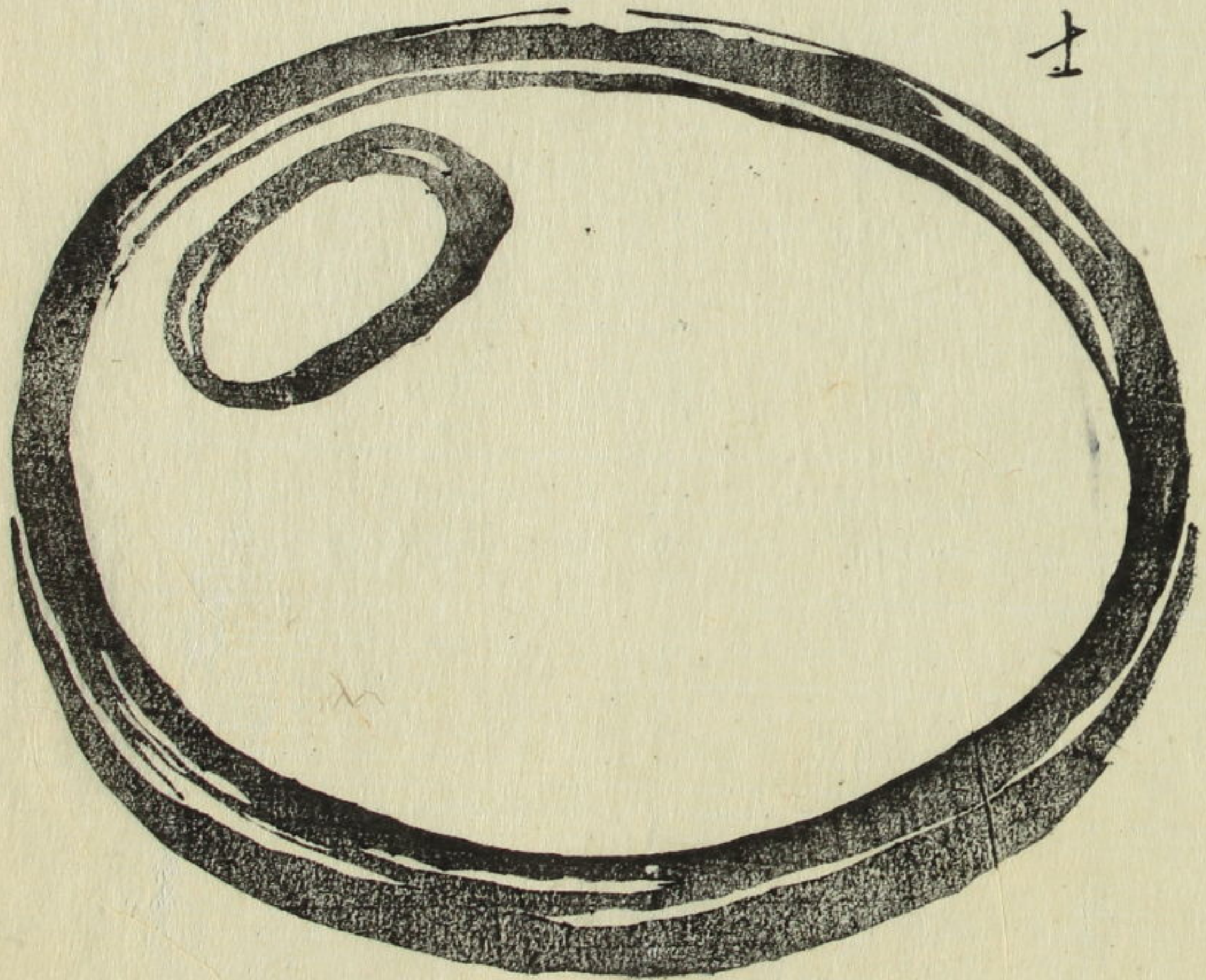
如去

ふふ

讀マ

筆

の海



奥具

濱秋志

志

高濱

蛙如角



濱頂

麦右舎

世雨

歳旦

首謀亭

年や玉布袋のふろのま

奥古

吉左右を誠ふ己第を一先

一甫

皆嘆や樹く一葉梅乃初紋

素同

初姿をハヤかけ此花を

多角

セハ保

樂ん年の浦詰第乃也

一甫

縁造しきりりおろの鏡立

奥古

正巻

疎梅や梅雪吹り大氷の友 多角

尺で重く冬くハ去又のり梅多本 素同

花ハすの種のを清き夕アハ 今

宵 奥

風声堂

友の内を才影くし梅孤花 雅文

せん去人の二葉や汗如梅葉 多角

ふと一葉帯其を物如去帯取り 奥古

正巻

芳翁の係みいさかみ
はあして

玉藻尾

花の陰を梅と他年のす清鏡 紫条巴

去 奥

勃：店

青柳より雪へいろく 論の友 梅尺

人 日

五末巻

かーつ、梅を、あき葉のふもを 雲和

去 奥

梅咲や雪一り去年如酒和人 逸史

草書

留厚中

雲如子年古くや川五層塔 如瓶

年由さき

言序尾

光倫如去流河を如為家 林之雲

や似係

二斗巻

録むしる神の一枚記儀如南 下物

年内さき

林之雲

汲子白の暮ハあるより井石水 因梳

草書

清得余

不之乎雖小人も其れをさるるのりま 石鯨

去息ハ

一文余

八羽如園くくさるん 苗如梅 竹秀

草書

林之雲

年流のく縁く發れもく糸系 棋北

去息

鳳羽唐

梅候や先祖乃幕如縛正殿 去云

人日

天竺菴

七草や唐も日本も明 鳥 舎鳳

冬、うほ

十甫三

うほふふ世をん雄也 雪佛 茶室

山威 善

八千坊

本具の香や継文年のお垢つね 合持

斗内立去

さき坊

すふふあは伸してきや冬の雲 舞雪

二高 仙

まのぬえや市井をいぬ批肥の雲 河巴

繁叶如枝く糸突るる由 一甫

靡る世と推移る風情少く 呂陽

芸を結んでえとの甘合と 羽六

糸拖新魚の雲より 小 五 楚流

吟ふ培踏き 具石 盤 石 鼓

つるしの世カラを 詠 乃 去 席南

二葉之をいさふ 永 乃 白 家笑

意風子お針のよえト柳多按
 有曲
 羨め〜向ふふ可止ハニタ攻
 仙真
 堀出〜と袖ふ此攻おんと可
 可止
 仕取て合点 都こ〜り
 萱子
 遠山ハ秋初了顔の力送云
 探石
 傾く月よ 儘の巻こ〜
 洞山
 礼お出扇ふとま玉 巻じ〜
 扇海
 走つ〜 筆乃 面白手 額
 笑巻
 花浮世人も思ふ如髪あ〜
 多角
 誰〜 結んで 巻舞乃仇
 云东

ナ
 柳よ吹と出筆ハ秋乃切封し
 陸上
 ツイト〜と〜と映よ云々の花
 若青
 大見那隠の巻乃 花乃〜
 龍水
 独按 廣の巻も 柳多を此
 雲漢
 瓢 草乃 洒ふも 酔少〜 春巻人
 柳枝
 石子 細のけり 柳〜 雲乃付ケ
 自吹
 紅# 妙持 布ふ大ハ 志ろをえ
 知陵
 云 後 山 巻あよのうらまし
 羊と
 旬 奮て 一 句を 巻今 月の友
 真古
 砂よ入ム 風子 巻乃 巻の物
 紫外

出向ふをさしりて人歎かよふこ

書古

携る如侍家城の〜〜

一笑

多
雪持て汝乃燕頭野あけ

叙夕

刀も貸して世百 福小

素同

肩車より送上物乃小侍由

指矢

幸〜〜あんと伯父の心包

碧錦

驛を隈に花如 暮希と暮

才子

田 隈のま行、扱も砥廉

其雁

妻 貞

逸史

梅咲や茅の 擔ふ 琴如音

川
市

久欠三斗五升
內度

英之國